

おしらせ



ICM 90 について

本年4月3日に立教大学でICM 90運営委員会が開催されました。また実行委員会はほぼ毎月東京または京都で開かれております。今回は、ICM 90に関連した4つの事項について報告いたします。

(1) ICM 90での分科会。

本年4月に京都で国際プログラム委員会の第一回の会合が開かれICM 90での分科会の分け方と名称がまじりました。

数理解科学全般を次の分科会に分けます。

1. 数理論理と基礎論(Mathematical Logic and Foundations)
2. 代数(Algebra)
3. 数論(Number Theory)
4. 幾何(Geometry)
5. トポロジー(Topology)
6. 代数幾何(Algebraic Geometry)
7. リー群の表現論(Lie Groups and Representations)
8. 実および複素解析(Real and Complex Analysis)
9. 作用素環と関数解析(Operator Algebras and Functional Analysis)
10. 確率論と数理統計(Probability and Mathematical Statistics)
11. 偏微分方程式(Partial Differential Equations)
12. 常微分方程式と力学系(Ordinary Differential Equations and Dynamical Systems)
13. 数理解物理(Mathematical Physics)
14. 組合せ論(Combinatorics)
15. 計算機数学(Mathematical Aspects of Computer Science)
16. 計算法(Computational Methods)
17. 諸科学への数学の応用(Applications of Mathematics to the Sciences)
18. 数学史、数学教育および数学論(History, Teaching and the Nature of Mathematics)

(2) 招待講演者の決め方。

ICM 90では約16の全体講演(1時間講演)、約140の分科会講演(45分講演)と約900の一般講演(10分講演)がある予定です。

国際プログラム委員会は1989年10月に開かれる第二

回の会合で、全体講演分科会講演の講演者のほとんど全てを決定します。今回はこのための候補を選出する任務をもった分科会ごとのパネルの委員長と中核委員3~5名を決めました。この人たちがさらに委員を加えて5~8人からなる委員会を構成し、来年6月頃までに講演者の候補をきめ、国際プログラム委員会につたえることになっております。

ただし、それ以後も重要な進展があれば、講演が追加されます。また日本の組織委員会も自己の責任で、2~3名の講演者を招待することを許されています。

一般講演者は会議参加者の申し込みによるもので、その取捨選択は日本側にまかされております。

この他、数学教育国際委員会(ICMI)が招待する45分講演がいくつか行なわれる予定です。

国際プログラム委員9名(うち3名は日本代表)は昨年5月のIMU理事会で選ばれました。本年4月の理事会ではフィールズ賞委員会委員9名、ネバンリンナ賞委員会委員4名が決定されました。これらの委員の名前はコンGRESが始まるまでは極秘とされます。

(3) ICM 90前後のシンポジウムについての連絡のお願い(ICM 90学術委員会から)。

1990年8月21~29日京都で開催されるICM 90には、各分野の数学者が多数参加されると期待されます。それに伴い、その前後にシンポジウムを開催する計画を現在すでにお考えの方々、あるいはこれから立案される方が何組もいらっしゃることを考えます。

そのような計画をなさる方々にとっては、ICM 90についての情報、例えば誰が招待講演者に選ばれたか等の情報が有用であろうかと思えます。またそのような計画の相互の衝突なども気になさるかも知れません。他方国際プログラム委員会でも、そのようなシンポジウムの計画について関心を示しておられます。

そこで、ICM 90直前、直後に開かれるシンポジウム(pre-conferences, satellite-meetings)に関係する情報を集め、また公開する情報のうち有用と思われるものを関係者にいち早く伝えるため、そのようなシンポジウムについてご存じの方々は、また未確定のものでもよく、また一部分の情報でも結構ですので、お知らせ下さるようお願い致します。

連絡先 ICM 90事務局

京都大学数理解析研究所内

(この内容の文書は、4月4日付で数学会評議員、ICM 90運営委員会委員、学術委員会委員、ICM 90関連シンポジウム等企画者にあてて出されました)

(4) ICM 90数学会特別募金('88年5月31日現在)。

(募金目標は3千万円以上ですが、3千万円として計算)

入金総計 = ¥13,256,000

予約平均口数(一人あたり) = 8

寄付平均口数(一人あたり) = 6

寄付者人数 = 439 予約者人数 = 439

寄付平均額 = ¥30,196 標準偏差 = ¥62,013

予約総計 = ¥16,798,000

(予約無しのご入金はすべて予約されたものとして扱いました)

予約達成率(=予約総額/3千万円) 55.99%

達成率(=入金総額/予約総額) 78.91%

目標到達率(=入金総額/3千万円) 44.19%

入金額の分布(一口は5千円) 予約額の分布

0口 <	1口未満は	3数	予約	0数
1口以上	2口未満は	63数	予約	25数
2口以上	3口未満は	220数	予約	195数
3口以上	4口未満は	9数	予約	12数
4口以上	5口未満は	37数	予約	57数
5口以上	6口未満は	10数	予約	4数
6口以上	7口未満は	21数	予約	24数
7口以上	8口未満は	2数	予約	5数
8口以上	9口未満は	1数	予約	19数
10口以上	11口未満は	17数	予約	15数
12口以上	13口未満は	1数	予約	1数
20口以上	21口未満は	43数	予約	67数
26口以上	27口未満は	0数	予約	1数
30口以上	31口未満は	3数	予約	4数
40口以上	41口未満は	2数	予約	4数
50口以上	51口未満は	2数	予約	2数
60口以上	61口未満は	1数	予約	1数
100口以上	101口未満は	2数	予約	2数
160口以上	161口未満は	1数	予約	1数

なお、1000万円、1300万円の入金達成を記念してそのときにご入金されたかたは、実務担当者から粗品を差し上げました。

なお募金関係のことを再記します。

募 金 計 画

名称 ICM 90 日本数学会特別募金
 対象 日本数学会会員および募金主旨賛同者
 募金 1口 5000円
 (1人につき2口以上を期待するが分数口も可)
 (20口以上寄付された方のICM 90の登録費は免除されます)
 目標額 3000万円以上
 募金期間 1987年から1990年8月まで
 募金団体 日本数学会
 募金方法

郵便振替にてご送金ください。

加入者名 ICM 90 日本数学会特別募金

加入者番号 東京 8-27526

郵便振替用紙は下記の実務担当者にご請求下さい。

実務担当者

飯高 茂(学習院大学理学部数学教室 03-986-0221)

日本数学教育学会から同学会会員もこの特別募金に参加したいとお申し出がありました。

集会記録

応用函数解析学シンポジウムについて

第9回

このシンポジウムは1986年11月7日~8日、東京理科大学講堂において、参加者約100名の下で行われた。プログラムは下記の通りである。

1. 明石重男(東工大): ϵ -Entropy analysis of stochastic processes by functional analysis methods.
2. 中川正雄(慶大理工): Detection systems of coherent optical communications.
3. 岡田紀夫(東理大理): Type, cotype and rates of convergence of Cesaro means.
4. 柳研二郎(山口大理): An upper bound for the capacity of discrete/continuous time mismatched Gaussian channel with feedback.
5. 大石進一(早大理工): Computational fixed point theory.
6. 古田孝之(弘前大理): $A \geq B \geq 0$ assures $(B^r A^p B^r)^{1/q} \leq B^{(p+2r)/q}$ for $r \geq 0, p \geq 0, q \geq 1$, with $(1+2r)q \geq q+2r$.
7. 室伏俊明(東工大総合理工): Fuzzy measures and Choquet's integral.
8. R. S. Ingarden(N. Copernicus Univ.; 東理大): Information geometry.
9. 奈良知恵(武蔵工大): Multiplier on Banach spaces of analytic functions.
10. 中村八東(信州大工): Knowledge engineering and structure of mathematics.
11. 梅垣壽春(東理大理): From functional analysis to Fourier analysis and to applied mathematics.
12. 梅垣壽春(東理大理): 中国大学見聞・中国風光万里。(梅垣壽春記)

第10回

このシンポジウムは1987年10月6日~8日、東京理科大学記念講堂において、参加者約100名の下で行われた。プログラムは下記の通りである。

1. 荒木徹(東理大理): On a relation between Kunugi structures and the net defined compatibly with bornology.
2. 上坂吉則, 塚田真(東理大理工): Gibbs states, stochastic relaxation and annealing.
3. 柳研二郎(山口大理): Capacity of discrete time